

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―」(2019年度第1回・通算第7回研究会)

日時：2019（令和元）年7月7日（日）10:00-15:00

場所：AA研マルチメディア会議室（304）

報告者：児倉徳和（AA研）・佐藤久美子（国立国語研究所・AA研共同研究員）

今回の研究会は、本課題の成果公開の目的で参加し、テーマセッションの形式で発表を行う“The 14th Seoul International Altaistic Conference (2019年7月21-24日)”に向けた打ち合わせと、成果論集の刊行に向けた打ち合わせを主な目的として開催された。

佐藤久美子（AA研共同研究員，国立国語研究所）

青山和輝（AA研共同研究員，東京大学大学院）

江畑冬生（AA研共同研究員，新潟大学）

大崎紀子（AA研共同研究員，京都大学）

児倉徳和（AA研所員）

菅沼健太郎（AA研共同研究員，日本学術振興会／一橋大学）

吉村大樹（AA研共同研究員，アンカラ大学）

※コメンテーター：久保智之（九州大学），塚本秀樹（愛媛大学），藤代節（神戸市看護大学）

「成果公開ワークショップについて」

本打ち合わせでは、標記のテーマセッションで発表を行う各氏が発表内容を事前に報告し、標記学会に参加しないメンバーを含めたプロジェクトの共同研究員全体と、コメンテーターを交えて討議を行った。特に、佐藤久美子氏は大崎紀子氏、菅沼健太郎氏のそれぞれと共著での発表を行う予定であるが、標記学会に参加できないため、学会での質疑に備え発表内容について特に綿密な打ち合わせを行った。菅沼健太郎氏・佐藤久美子両氏はトルコ語と現代ウイグル語のイントネーションのパターンを [+focus] 素性を持った形式の性質をもとに説明すること試みたものであるが、事前の討議では [+focus] が統語的な要素か、それとも情報構造にかかわる意味的な要素か、という区別がされていないのではないか、という点について議論が行われた。

討議にはコメンテーターとして参加された久保智之教授（九州大学），塚本秀樹教授（愛媛大学），藤代節教授（神戸市看護大学）も参加し、菅沼健太郎氏・佐藤久美子両氏が主張する、語の持つアクセントを維持したまま節を形成し、その後語のアクセントを削除する、という産出プロセスに対し、久保教授から、アクセントを保持した後に削除するというプロセスが余剰であり、産出プロセスとして不自然なのではないかという意見が寄せられ、議論が行われた。

共同研究員全員

「成果とりまとめに向けた打ち合わせ」

最終年度を迎え、本課題の成果を論集として公刊すべく、プロジェクトのメンバー全体で計画を話し合った。結論として、学会のテーマセッションで研究発表を行うメンバーだけでなく、プロジェクトメンバー全員の寄稿によるものとする事、また本課題にコメンテーターとしてご参加下さった方々のご寄稿も歓迎すること、刊行は2020年度中とすることなどが決定された。

参加者は13名（所員・共同研究員9名、コメンテーター3名、その他1名）であった。それぞれが専門とする言語・分野の見地からコメントを述べ、活発な議論が行われた。